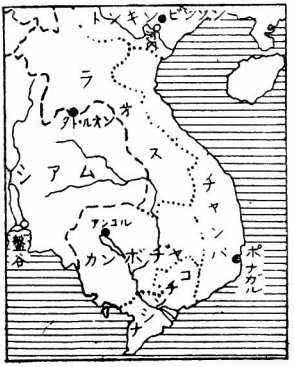


學界展望

印度支那考古學

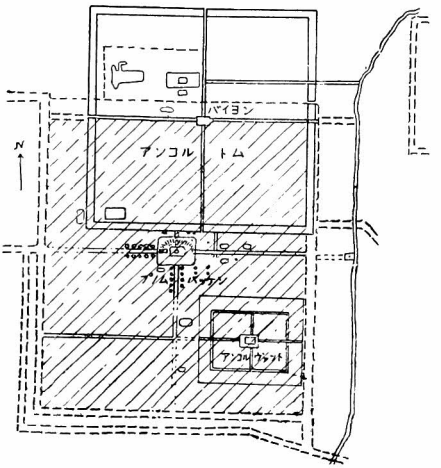
——特にその寺院址調査——

河内にある佛蘭西極東學院は印度支那における歴史研究の中心機關である。考古學についても、もちろんさうである。この一團の佛蘭西人の業績を離れて、印度支那考古學を考へることは全然不可能である。この數年間における極東學院の考古學的活動はおのづから二つの分野を有した。ひとつは東京・安南地方における漢・六朝の支那墳墓であり、他はカンボヂヤのアンコル Angkor 都址の調査であつた。前者は漢代文化の播及を物語るものとして興味があり、*London Illustrated News* も新聞種にとりあげた。また歴史學研究、人類學雜誌も河内に遊んだ小林知生君の手記を登載した。私は後者を中心として印度支那における寺院址調査の一斑を紹介したいと思ふ。據るところは主として *Annual Bibliography of Indian Archaeology for the year 1933*, *Revue des Arts Asiatiques IX, 1*, *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient XXXVIII.* の記事である。

アンコルはクメール文化の中心地である。九世紀初頭に「瓜哇」(スマトラ、或は馬來半島)から來たジャヤヴアルマン二世 Jayavarman II が都城を建設してより、宏大なる幾多の寺院——例へばアンコル・ヴアット、バイヨン等が建立され、その遺構は今日に現存する。そしてこの遺址の清掃・修理・復原の保存作業に並行して調査事業が行はれてゐるのである。この地方における考古學的成果はすべてこの勞苦と忍耐を要する作業の結果である

ことを銘記せねばならぬ。アンコル保存作業の主任マルシャル氏 H.Marchal は一九三三年十一月、バルマンティエ氏 H. Parmentier に代つて印度支那考古學調査部主任となり、したがつて當時カンボヂヤ記念物保存を擔當してゐたトゥルヴェ氏 G. Trouvé がアンコル保存の主任となつた。マルシャル氏には Guide archéologique aux temples d'Angkor, 1928 なる案内書があるが、その後におけるアンコル研究の目覺しい進展はこの一九二八年の書物すら正にアウト・オブ・デートの書たらしめやうとしてゐる。そのひとつはバイヨン寺院の年代觀である。バイヨン寺院はアンコル・トム Angkor Thom（トムの都邑）の方形都城の中心にある。したがつてジャヤヴァルマン二世の建設した最初の都邑アンコルの中央に建立した寺院に比定され、九世紀末とされてゐた。この年代觀はアイモニエ氏に基くのである(Aymonier ; Le Cambodge. 3 vols, Paris 1900, 1901, 1904)が、パルマンティエ氏も襲ひ、またマルシャル氏もしたがひ、むしろクメル建築史の通説であつた。しかしその様式上からする疑問が、ミュゼ・ギメーのステルン氏 Ph. Stern をしてバイヨンとアンコル・トムの方域が決してスドック・カク・トム Sdok Kok Thom の碑にいふジャヤヴァルマン二世のアンコル、すなはちヤソダラプラ Yaçodharapura にあらざることを證明せしめた。ついでゴルウベフ氏 H. Goloubew が別にヤソダラプラの位置を確定するとともに、セーデ氏 Coedès はバイヨン寺院が實は十二世末か、十三世紀初頭の建築にすぎぬことを證明した。かくてバイヨン寺院年代觀のドグマは完全に粉碎されたわけであるが、それではヤソダラプラの位置とその中央山頂に建立したといはれる寺院とはどこにあるのか。これに對して一九三一年、ゴルウベフ氏は誰も考へ及ばなかつた大膽なる一假說を提出した。それは歷代の都邑が必ずしもエキザクトに相かさなるものでないといふことから出發して、アンコルの遺跡圖を案じ、プノム・バケン Phnom Bakhen すなはちアンコル・トムの少し南にあるシヴァ神の山頂寺院とこれを中心にして劃された方域——それは西・北・南の三邊は盛上つた土手により、東の一邊はシェム・レアプ河 Sien-réap によつて構成される——こそヤソダラプラとその中峯寺院にほかならぬと言明した。一九三一年十一月に行はれた踏査をはじめとして、三二年から三四年に亘る組織的發掘はあらゆる

點においてこの想定のたしかなることを證明した。まづプノム・バケンを中心とする境域遺構及び道路その他の調査によつて、嚴正にシムメトリカルな都邑の體制が明らかにされ、その他、舗石、臺、階段、池、彫像、陶器の堆積等がプノム・バケンを中心とする古都の存在を確めた。そして一九三一年やうやく發見され、セーデ氏 Coedés; Inscriptions malaises de Çrivijaya (BEFEO. XXXX. pp. 28-80) によつて釋されたひとつの碑文はカムラテン・ヤガト・ヴナム・カンタール、すなはちスドック・カク・トムの碑文にいふ中峯の神に當然奉獻さるべきものゝ表を含んでゐたのである。かくて多年の誤解と不確實の後にやうやくヤソダラプラ、すなはち最初のアンコルの位置が確定された。アンコル・ヴァットはこの都邑より數世紀後にその東南部に建設され、また數世紀後にアンコル・トムはこの都邑の東北部を含んで建設されたのである。



もうひとつの發見といふのはプノム・バケンの西方八粁にあるプラサト・アク・ヨム寺院 Prasat Ak Yom である一九三二年の暮、トルゥヴェ氏によつて發見されたのであるが、それまでといふものは全く完全に土中に埋沒してゐた。三層のピラミッドと三層の塼築基壇と支へ壁によつて僅かに保たれた泥築基壇とが發掘された。殊に中央聖室の下に深い竪穴がありその底は部屋をなしてゐることが知られた。その竪穴は既に盗掘の厄に遭つてゐたが、疑ひもなく原初のものである。こゝに發見された一碑文はガムビレスヴァラ Gambhire, vara 卽ち深井のシヴァ神に奉獻したものであつた。この發見は考古學者に多大の指唆を與へた。といふのは寺院の中央に寶物を埋藏することは必ずしもこの寺院に限られぬ筈だからである。當のトルゥヴェ氏はすぐこの方法を上述のバイヨン寺院に應用して、或る程度の成功をおさめた。それは十

四米の深所で水層に遭遇し、以下の調査を斷念しなければならなかつたけれども、その上部において彫像破片を發見した。この彫像は復原すると四米七十五糎に及ぶ大像で、ナーガの上に座した佛像である。大像なるにもかかはらず丁寧な作行で、バイヨン藝術の一代表たるを愧ぢない。また同様な深掘り調査は一九三四年九月、アンコル・ヴァットの中央聖堂にも企てられたが、また十四米の深所にて水層に遭ひ中止を餘儀なくされた。さて深井掘りの調査はしばらくおくが、このアク・ヨム寺院の様式上の位置である。ステルン氏は一九三四年裝飾細部の精査から先アンコル藝術の最後、もしくはアンコル藝術の最初にあらはれたものとの見解を披瀝した。そしてそれに最も近いものとして、これも近年ロルオー Loruoh 群中にて發見されたプラサト・プレイ・プラサト Prasat Prei Prasat 寺院をあげた。G.Coedès, Les capitales de Jayavarman II (BEFEO., XVIII, p. 113) とにかく建築細部の研究はアク・ヨムとプレイ・プラサトの極めて接近した時期の建造物なることを確實にした。そのうち後者は前者よりいくらか發達してゐるが。そして九世紀中葉から後半にかけて建設されたロルオー Loruoh バコン Bakong プラーコ Prakô ロレイ Lolei 等に見るアンコル期の様式と先アンコル期の様式との中間様式であることが認められるに至つた。

バイヨン寺院建築の年代ひきさげ、そしてそれの正當なる位置の附與によつてアンコル期建築史はスムースな整序を得た。さらにアク・ヨム、プレイ・プラサトの中間様式の發見によつて先アンコル期との連結がよりスムースに進展する。見やうによつてはクメール建築の一貫した配列がこゝ數年間のアンコル研究の輝しい行績であるともいへるであらう。アンコル研究に關していま一言附け加へておかなければならぬことは一九三二年をもつて完結したアンコル・ヴァット寺院 Le temple d'Angkor の三部七冊に亘る巨大なる報告圖譜であらう。それはやはり一九二六年に出版されたバンタイ・スレイ寺院の圖譜 Le temple d'Içvarapura につぐものであつて、ともに極東學院考古學紀要 Mémoires archéologiques publiés par l'École Française d'Extrême Orient の一部をなすものである。バンタイ・スレイ寺は十世紀にできたシヴァ神の寺院で十四世紀に大增築をやつたものでアンコル・トムの東北二十一粁の地點にある。實にフィノー氏

L.Finot をして「クメール彫塑の極盛は十三世紀にあらずして十四世紀にあり」といはしめたものはこの寺院があるためである。アンコル・ヴァット寺院はシュリヤヴアルマン二世 Sûryavarman II（一一一二—一一八二）——一説にはシュリヤヴアルマン二世の爲めに建てたともいはれてゐる——の建立で、ヴィシュヌ神に奉獻したものである。保存もよく、その林間に聳立する姿は最も旅行者の眼を樂しませる。

チャンパにおいても修理と復舊作業が着々として極東學院の手によつて行はれてゐる。この方面を擔當するものはクレイ氏 J.Y.Claeys である。一九三一、三二年はナトラン地方の荒廢したポ・ナガル寺院の復舊に集中された。そのほかチャバン Caban (Binh Dinh) ではチャム藝術の後半（チャバンは一〇〇〇—一四七一年間首都であつたヴィジャヤ Vijaya である）に屬する砂岩の彫刻を多數に得た。この彫像は實に樣々な影響が奇妙なまでに並存してゐることで注意される。まづクメールの影響は十二・三世紀の交におけるカンボヂャ人のヴィジャヤ占領によつて說明されるであらう。支那・安南の影響は裝飾細部のマンネリズムにあらはれる。豐富な烏貝類の意匠は印度文化の影響以前における印度支那古來の傳統への復歸を物語る。衰退期における瓜哇藝術のごとく、後期のチャム藝術はいまゝで潛在し印度文化の外皮でカムフラージュされてゐたところのインドネシア要素の再現が著しい。この點において最も特徵的であるのはチャバンにおける婦人の乳房によつて飾られた列石の基壇である。これは何のシンボルであるのか。ゴルウベフ氏はスマトラのトバ・バタク族に類似の裝飾があることを示した。ハイネ・ゲルデルン氏は巨石文化期にまで遡るインドネシアの生殖儀禮の殘存であらうといふ。

ラオスではやはり極東學院のフォムベルトォ氏 Fombertaux によつてヴィエン・チャン Vien Chan のタト・ルォング寺 Th'at Luong の復舊が活潑に行はれた。

東京地方ヴィン・エン Vinh Yen のビン・ソン Binh Son では支那式四角十一級の塼築塔が一九三三年に發見された。クレイ氏は九、十世紀といひ、セーデ氏は十世紀といふ。これに對してコーラル・レミュザ夫人 G. de Coral Rémusat は塼に彫られた裝飾にはチャムの影響がありと見、その方面からむしろ十一、二世紀との說を提出してゐる。

（水野清一）